俳諧七部集

春の日
冬の日
ひさご

一

へ 5
5625
1

門 へ 6
號 5625
巻 1

昭和十六年一月十二日
尼野貴英氏
寄贈

早稲田大学図書

曙やんとんくのやおきあひく
熱田おりるに伸されて渡し舟さしかゝ
くおわゆく比并松のくさを見て口も
いとのうなわ重五がねわれをさる
竹墻かとちうさよちらしけてさ
の芽しきを　斗母乳出済家

二月十八日

まうくや人さわぐの伊勢まいり　荷兮
桜ちる中馬ながく連　重五
山うすう山月一疋の鈸立く　雨桐
鐘なりおわ史もしわるゝや　李風
あなたのよふくはい踊なく　昌圭
くゝしわよ沖の岩つむくみて　執筆

須广寺に行の椎に脱く笄　重五
とれくかゝる笛を戴く　荷兮
文王のためしよけ雲を土はりて　李風
雨のあとの角のなすさ草　雨桐
肌えここ一度ハ背をかゝくせり　荷兮
傾城乳をとうくと晨め　昌圭
貴さに績に人の紙移りし　雨桐
りやくとつく神輿うく里　重五

鳥居より半道奥の砂行く　昌圭
花に長男の帋鳶あぐらん　李風
柳より陰かちらに鞠るなや　重五
入りは日て蝶いそがしかり　荷兮
二
えりゐ、麥かくは家に連行く　李風
うら懐り梓きられ　雨桐
黒髪をたぐめて白粉し　荷兮
いとしもしこき五位の針立　昌圭

杉の木に宮司か門はされなく　雨桐
さゞれの跡も見えぬ時雨で　重五
朝朗豆腐を篶にうりけり　昌圭
念仏さぶきに秋わすれ也　李風
穂蓼生ふ蔵を住ゐに侘すて　重五
ゑ名を揃の名によぶか月　荷兮
傘の内近付になる雨の昏よ　李風
約般おふく出女ぐく　雨桐

うらゝかの心なく人のよし　荷兮
将親ひとりを二人して何を　昌圭
世にあはぬ局涙に年とりて　雨桐
記念にとらし姉の菅畑　重五
いくはるを花と竹とにいそがしく　昌圭
才も兄も為とてしらへゆく　李風

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら　旦藁

おもしろふかすむかたの鐘　野水

春は漸節供なるらん袴着て　荷兮

口そゝぐへき清水ならなく　越人

松風にたをれぬ程の[illegible]　羽笠

賣のこしたる虫とかし月　執筆

ウ

笠白き太秦祭る也けしも　野水

菊わけ垣によい子見えくる　旦藁

表町ゆづりて二人髪剃ん　越人

暁いつも車ゆくらし　荷兮

鱈負ふて大津の浜に入にけり　旦藁

何やらんこの国の声　越人

誂わするゝほどゝ蛬かや　羽笠

萩さくたびに一百日のしゝ　野水

里人は薄を鏡に妹の宿　越人

月かゝる浪に重石をく橋　羽笠

ちるはなは水の浪に乱鮎　野水

汎ぞをは春湯の山　旦藁

のどもしや鈍紫の袂伊勢参　越人

侍のえらし代の眉の図　荷兮

物よりて軍の中は汗わきよ　羽笠

名もから栗とちぐりにけり　野水

大年を念仏となふる恵美須棚　昌碧
こもらばや無我なる人の隠家や　越人
ゆりわすれぬ入りける枸杞垣　荷兮
もちよ廿日ともやら麦の粉く　羽笠
一夜への宿を馬にて寺なれや　野水
こゝ観まつることしの月　旦藁
陽炎(カゲロウ)入らしのくわする丈帰て　越人
ま醒独りしれ哥いそく　荷兮

ウ
田を耕くむらが里の生なり　羽笠
力の物をたばりし中の子　野水
健(サカ)やミ井のまるれ紙よりよ　旦藁
るびくのミおづ雪のふく　越人
久つまてり廿九日の月さむき　荷兮
天の下しきより氷ふてけ　羽笠

三月十六日旦藁か田家にとまりて

蛙のみきゝてゆゝしき寐覚かな　野水

額にかゝるゆふそらの雨のあし　旦藁

蕨煮る岩木の臭き宿かりて　越人

まじ〳〵人をさそふ馬の子　荷兮

立てのる渡しの舟の月影に　冬文

芦の穂を摺る傘の端　執筆

ウ

磯ぎはに施餓鬼の舟の集りて　且藁
岩のあひより藏うつる里　野水
雨の日も瓶焼やらん煙たつ　荷兮
ひだるき事も旅の一ふし　越人
尋ぬる坊主ハ住まじ淀井也て　野水
解てやをりん枕むすびし　冬文

今宵ハ更たりとてやみぬ

同十九日荷兮室にて

咲まじの菊にハ刈しき白露ぞ　越人
秋のみなとにうかぶ　頓　且笑
初瀬に滝もよしけり火を打ぬ　冬文
別の月にながらへるを　荷兮
詠めぬ花四の宮らハ唐輪して　且藁
まはしき道の是もむかし　野水
一永き日やしらとけるに高から　荷兮
蓑の子年まつる五月雨の中　越人

紹鴎が瓢はありて米ハなく　野水
連哥のもしにあるはつかし　冬文
瀧壺に柴押まげて音もなし　越人
岩苔とりの籠にさげしも　旦藁
むきかへて帛（キヌ）いそぐある世の中る　冬文
筵二枚もひろき我庵　越人
朝毎の露あはれさに麦作ル　旦藁
碁うちを送るきぬぎぬの月　野水

風のなき蜘の日毎に網入よ　昌碧
る羽の湊おどろかしけり　冬文
ウ
あさましみさぬ気色見えて歩行　野水
借く一句章の君なり　亀洞
ふるの子水汲よ魚起く　越人
餅を食はせて上君が代　旦藁
山さくら所の汲を遊ばせよ　冬文
もしもしはてしまひ庵の人や　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭　越人

山吹のあぶなき岨のくづれかな　越人
蝶はねとりも帰るし　舟泉
きさらぎや餅晒すべき雪おりて　聴雪
行幸のくるよ洗ふ玉器　蠡髭
朔日を鷹も川鍛冶のいそく　荷兮
月なき空の門はやくあき　執筆

春

昌陰の松にもとむ御代の春　利重

元日の木のまから鶯足ならし　重五

初春の遠里牛のなく日かな　昌圭

くくみす海をながむる麦畠　胤桐

門さむれ芳菜園の雪さむし　舟泉

鶯の音氷にの間く拗白し　羽笠

舟ノくの小松に雪の残りけり　旦藁

曙の人顔牡丹霞にひらきけり　杜国

綴てらし元日星の曙りけれ　犀と

星さらくかたきぬ人の写の色　香霞

なしとても小松角子牛の夏　聴雪

朝日二分柳の動く匂ひかな　荷兮

之以ゝの末ひくき霞かな　同

芹摘とてこけて風なき雫かな　昌圭

のりてはんの作へかりし

みかへれば白壁いやし夕がすみ　越人

古池や蛙飛こむ水のおと　芭蕉

傘張の睡り胡蝶のやどり哉　重五

山や花墻根墻根の酒ばやし　亀洞

花にうづもれて夢より直に死んかな　越人

春野吟

足跡に桜を曲る庵二つ　杜国

林際寺かくれぬのりのさくらかな　冬文

榎木まで桜の遅きながめかな　荷兮

餞別

藤の花たゞうつふいて別哉　越人

山畑の茶つみぞかざす夕日かな　重五

蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春のくれ　同

夏

ほとゝぎすその山鳥の尾ハ長し　九白

郭公さゆのゝ焼くぬる夜か　李風

かつくる板倉の脊戸の一里塚　越人

さしもしさる草かゝれ林の下闇　杜国

よ行のうしろをたのむ崖ん　亀洞

傘をさしまで蕨の束や　舟泉

武蔵坊をとゝつね

さしかゝやまくゆ宮の夜川　高露

手代の乗る望とゆかれゆく

鳥ともかくれからくらき夕月　聴雪

老聃曰知足之足常足

手ならは雑炊につゝき菜哉　越人

篝火の微雨にほそて鳴蚊かな　柳雨

はしまるをならむかふ中にすゝしり　廬文

萱草ハ随分暑き花の色　荷兮

蓮池のふかさわするゝ涼みかな　仝

暁の夜後暑さか遅き卯月　昌圭

夏川の音に宿かる木曽路哉　重五

譬喩品ニ三界無安猶如火宅
といふ事を

六月の汗ぬくひ居る台かな　越人

秋

背戸の畑なすひ黄はみてきりきりす　且藁

貧家の玉祭

玉まつり柱にむかふ夕かな　越人

しまくまて一座へ入るゐんくん　雨桐

そわく人をやとむる月見かな　芭蕉

山寺の米はくほとの月夜哉　越人

風よりて家も西日も秋の月　野水

八嶋をかける屏風の絵を見て

具足きて顔のみ多し月見舟　仝

待恋

こぬ殿を唐黍高しみおくりて　荷兮

閑居増恋

秋ひより琴柱はづさぬ住居かな　荷兮

[illegible]　舟泉

冬

馬をぬき牛ハクヽ白め村しぐれ　杜国

芭蕉翁を宿し侍りて

霜さむき旅寝に蚊屋を着せ申　大垣住　如行

雪や[illegible]の手ぬ[illegible]　昌碧

馬をさへながむる雪のあした哉　芭蕉

行燈の煤けぞ寒き雪のくれ　越人

芭蕉翁をおくりてかへる時

この頃の氷ふみわる名残かな　杜国

隠士にかりなる室をまうけて

おもしろき寝筵ひけり冬の竈　荷兮

貞享三丙寅年仲秋下浣

笠は長途の雨にほころひ帋衣は
とまり〳〵のあらしにもめたり
侘つくしたるわひ人我さへあはれに
おほえけるむかし狂哥の才士此
國にたとりし事を不図おもひ
出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとばしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国
日のちり〳〵に野に米を刈　正平

わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすごすごとなく　荷兮
影法（カゲボウ）のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家（カライヘ）　杜国
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧にふね引人はちんば成　野水

たそがれを横にながむる月ほそし　杜国
となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衛の花のさかりきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顔おぼろなる　重五
いまぞ恨の矢をはなつ声　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜国

笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しらじらと砕けしは人の骨か何　杜國
烏賊はゑびすの國のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけし郭公　野水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　杜國
わがいのり明がたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜國
廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども壮年いまだころもを振はず　埜水

さし川雪をれたさしを清まてうる　杜國

霜にまた見る蕣の食　芭蕉

暁の家はうて芋いある蝶の羽をしく　荷兮

うつらうす貴すまれとろ車れきるのあ　重五

麻呂が月袖に鞨鼓をならすらん　正平

桃花をたをる貞徳の富

ゐら鷺深き田螺掘あへて　杜国
奥のこしらへ紙只なきてなく　羽笠
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
縁さまたげの恨のこりし　重五
口おしと瘤をちぎるちからなき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　杜国

縄あみのかゞりはやぶれ壁落て　重五
こつこつとのみ地蔵切町　荷兮
初はなの世とや嫁のいかめしく　杜国
かぶろいくらの春ぞかはゆき　野水
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなり　荷兮
うぐひす起よ紙燭とぼして　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三線からん不破のせきびと　重五

ゑすりに笑ひて千する碁をとふ　芭蕉
祢ざめ〱のさても七十　杜国
奉いかめ次低堂を建うらかなん　重五
ひとりの傘(カサ)化下骨(コツ)おさくれ　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕まぐれ　杜国
まどに手つから薄(ウス)様(ヤウ)をもちきぬ　野水
月に出まてる唐輪の髪を茶筅て　荷兮
恵をもぬくこゝろ臨済をまつり　重五

秋蟬の虚(ウツ)に声きくしづかさは　野水
藤の実つたふ雫ほつちり　重五
袂より硯をひらき山の月　芭蕉
ゆるさるゝ典(ス)侍(ケ)の局か内侍か　杜国
三ケ化乞む鸚鵡尾による化るはしくさ　重五
しく絶のとれさしく越の猟活り　荷兮

つえ花ひく事僅く　　中歩

つゝみかねて月とり落す霽かな　　杜國

こほりふみ行水のいなつま　　重五

歯朶の葉を初狩人の矢に負て　　野水

北の御門をおしあけのはる　　芭蕉

馬糞掻あふぎに風の打かすみ　　荷兮

茶の湯者おしむ野べの蒲公英　　正平

らうたげに物よむ娘かしづきて　重五
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜国
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麦さへ青し滋賀楽(シガラキ)の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜国
紅花買(カフ)みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五

まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
仏喰たる魚解(ホド)きけり　芭蕉
縣(ケン)ふるはな見次郎と仰がれて　重五
五形(ゲンゲ)菫の畠六反　杜国
うれしさは江鮒の雀となりし　芭蕉
真昼の馬のねぶたがほ也　野水
おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜国
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮

捨しみを宗祇長（タケ）きのれつらん　晩水
晦（ミソカ）日をさむく刀売る年　千春
雪の花呉孫國の笠ぬかりけり　荷兮
襟もりき雁の斥候をよく　文鱗
あらし人も橋なき館で春雨をし　李下
芥子の花人も名をこそ見れ禅　杜国
三ケ月の東に晴く鐘の霜　芭蕉
揉漁の汲くしく琴に入とも　者　好春

亭主月なれやうしてまぜと旅ぐる　林國
禅よる来会佛薮なれ魚さつる　荷兮
このはしすきしろ燈消けしに起俵く　野水
おそれの宮川も夜気の常りよう　亭叉
其の花飛たまる花此のくらま文人　荷兮
その宮も寂りなきまゐをなぐく　その坊

なに波津にあし火焼家はすゝけて
もくすまれゝ也

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとゝぼん娵乳を鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜國
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠

賀茂川や胡磨千代祭り微近き　荷兮
いはくらの聟なつかしのしうと入　重五
おもふこと布搗哥にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火をおかぬ火燵なき人を見ん　芭蕉
門守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の陰にこもり　荷兮

霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず款冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗　荷兮
宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜国

西南に桂のみどり高くさき　羽笠
蘭のあぶらに卜木うつ音　芭蕉
賤の女が賢なる女見てかへる　重五
釣瓶に粟をあらふ日のくれ　荷兮
はやり来て撫子かざる正月に　杜国
つゞみ手向る弁慶の宮　野水
寅の日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地　羽笠

いのりして汎をもちぬ人の像　荷兮
泥くさき汲のさゝら水芹の根　重五
粥すゝる傲のつま恥かしこまり　野水
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北野のみなくし簾おしやらく　羽笠
ねふりさます夢と青るむしる母　杜国

田家眺望

霜月や鸛(カウ)の彳々(ツク)ならびゐて　荷兮

冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉

樫檜山家の体を木の葉降　重五

ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜國

音もなき具足に月のうすうすと　羽笠

酌とる童(ワラハ)蘭切にいでし　埜水

秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜国
茶に糸遊をそむる風の香　重五
雉追に烏帽子の女五三十　野水
庭に木曾作るこひの薄衣　羽笠
なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮
麻かりといふ歌の集あむ　芭蕉

江を近く独楽庵と世を捨て　重五
我月出よ身をおぼろなる　杜国
ちぎれ衣笛に落花を打払　羽笠
籠輿ゆるす木瓜の山あい　野水
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
乞食の蓑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜国
御幸に進む水のみなかみ　重五

手にてる年は小角豆の花もなし　野水
萱屋まばらに炭團搗く臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮實　芭蕉
志ら川のまゝし飯臺のさく月のお　重五
霧とくこゝろ風やうの明しよ　杜国
釣樽をり屋根ゆのれする行庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水

元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　うかゝる
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜国
春のしらすの雪きえさる　重五
水干を秀るの聖わかやかに　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　うりん

江南春　珠頭竭ひとゝを追しそこれは
是なる將のをとゐ酒を乞かむ芭蕉ら
あふ江戯の大樽は浩々ぞ江湖をわた
礼也いつる婦人風子も異なり五にゆると
役なん恵子ゆしって関さと細　ら
につゝくおもひとわるに雖ってあや
かおきてけさちる　隠る醒てさるよ
日月陽秋ことらこの仏して雪はあけ

追加

いかにみよと難面しをうつ霰　羽笠
樽火ありあゆみのはての松　荷兮
こくさ刈下葉に髪をちやせんて　重五
檜笠ゝ宗長か庵も銘茶　杜国
郭にて蛤かゝりし月の色　海　芭蕉
ひらりと橋をたつの木曽の岐阜山　埜水

和乃闇なる郭公も、のたゝと鳴く
あるを古人とも見えさるゆへて高風雅
乃藻思をいつまても是いつれなる
ところなしして　乾坤の外なることを出て
其のことを云て魯け肉なたとりの

元禄三六月

越智
越人

花見　翁

木のもとに汁も鱠も桜かな　翁
西日のどかによき天気なり　珍碩
旅人の虱かきゆく春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘(ヒキハダ)　翁
月待て假の内裏の司召　碩
籾臼つくる杣かはやわざ　水

鞍置る三歳駒に秋の来て　翁

名はさまさまに降替る雨　碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水

中にもせいの高き山伏　翁

引のみ手を唯一方え落しけり　碩

かれきる絹も里家はかりけて　水

捨むるも男つまの喰ふて花の風　翁

月見る秋の雉れこゝさ露　碩

秋風ちる船をこえる波の音　水

鴈ゆくころや白子若松　翁

千部読花の盛の一身田　碩

巡礼死ぬる道のべの墓　水

何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁

文書ほどの力さへなき　碩

羅にもよしや銭はとられて旅だち　水

熊野みたしと泣給ひけり　翁

手束弓紀の関守の頑に　碩
酒でとけたるあさ湯ぬるみ　水
双六乃目をのぞくまで暮かねて　翁
假ぬ持佛にむかふ念仏　碩
中くに土間に座せし番頭　水
一面気のつよき置すゑなくなもの色　翁
焼れくいつも澤乃わきを莫　碩
存を恨しに明残る月　水

花落あまてまて沈てとし枯く　翁
唯四方なる草庵の露　碩
一貫の銭むつかしの化し遣り　水
醫者乃かうとるい飯をのみ　翁
花咲かる芳野あたりを欠廻　水
蛇りさうし壷の山中　碩

翁　十二
弥碩　十二

曲水 十二

いろ／＼乃名もむつかしや春の草　珍碩
うたれて蝶の夢はさめぬる　翁
蝙蝠ののどかにつらをさし出て　路通
かゝる駕籠乃とをしぬ峠越すか　仝
紫蘇の実をかますに入る夕間暮　碩
親子ならびて月に物くふ　仝

秋のゝ宮もゝねゝの世路ひらか　通
こねくされてハころふ侍　仝
よつり香乃羽織を肩よひきまとひ　碩
小六うたひし市なかゝる花　仝
饒箔乃ちいさく見ゆる川の端　通
念佛申てねむるつのき　仝
こしらえし茶もさめて来燭　碩
底形をし里乃夫よわかされ　仝

旅姿稚き人乃媚つれして　通
花まであひよ月ハ朧夜　仝
春がのさ手椽の下を和田なり　碩
生鯛あかる浦なるまいり　仝
け村の座よよ醫者なきろわ　荷兮
持ろえんをけんさのせなとらよ　越
かさつさる安紙退屈も見ゆる　与
まつさ法もなす酒乃法勧めて　人

なゝつなやる秋乃夕をまちひろき　与
蕎麦こそ白けり　山寺胴中　人
うかんさん星乃またれの庵の歎　兮
きこえくもつ子のこゑか裸也し　人
我つかしや世の中亭主とまちよまも　与
文殊の知恵も　槃特の愚癡　人
忘れかね藏み未来ひし味噌　兮
何ともきらぬよ　二階る羽棚　人

春の夜の花のしらみて鶯哉　兮
まつふくるま　顔をうへぬるして　仝
汗の香をかくえく衣をかけし　人
恋きるとれ顔そうちあれてふる　仝
見かうつ文百人まて照らす　兮
またい旅とも花もちらさる旅　仝

琢花九
旅一

係通八
荷兮十
越人八

城下

鉄炮乃遠音に曇る卯月かな　野径
砂の小麦乃瘦てかなし　里東
西風にますほの小貝拾はせて　泥土
なまぬる一川鯯ひるまかな　乙州
暮いそのひ二人きつれるまでよ　怒誰
秋の萩書物抱えもちかね　珍碩

無理花ん細手に杦をとられて　筆
団の中に杦をく人見寝かちある　野径
寐ても又川筋をさく堂へ　里東
藪乃松のしき生つきしや　泥土
馬子は石部を屋をとうやきて　乙州
一里ときもち山乃下荻　怒誰
見え初まで家居に定も篤かし　泥土
捨れ世ハ澗雨ゆれしくれ　里東

雪舟よ衆銭の極安川寒さんに　野径
立歩につまく丁百ちる銭　乙州
月花よ己をきよくる娘もせ　珎碩
若衆見ん乃瑞なるかりさ　早蕨　怒誰
くもれまるよ針ても教てすれれす　里東
生気遍　針ら婚主　泣むす　珎碩
乃みたおり居酒の茫乃一躁(サウキ)　乙州
古さきくちかのさる　獨禽　野径

附くも百姓まても烏帽子きて　怒誰
配所を見廻ふ供御乃蛤　泥土
各和かまれハ舩路美まん泣やん　珠碩
連も力ミも皆に居なり　里東
かゝ風乃大悲寺縄手旅通　野径
蝶乃ころるに用叶へさ　乙州
櫛削ミ我慕まちへさぎ古渡　泥土
名乃辺まち月ゝ菜食贈もす　怒誰

看経乃嗽に遣さるゝ喘気哉　里東
四十を老さかう見ゆる際　珠碩
髪くせに枕乃跡を寝ましく　乙州
醉を細かにあけて吹るゝ　野径
粉村乃花ハ宮乃菜に毎年見　怒誰
田なゝ岸隅の苗乃ゆかりさし　泥土

野径　六
里東　六

泥土　六
乙州　六
怒誰　六
珍碩　五
筆　一

雑

亀乃甲烹らるゝ時ハ鳴もせす　乙州
唯牛糞に風乃ふく音　珍碩
百姓乃木綿仕廻ハ冬のきて　里東
小哥そろゆるからうすの縄　探志
獨寐つく奥乃間ひろき旅の宿　昌房
蟷螂落てきゆる燈　正秀

秋萩乃御前にちらす坊主衆　及肩
風呂水加減乃志ろ〻の盛けり　野径
鶯乃なきさし静りて鳴都　二嘯
雪乃やうなるかまくらの塵　乙州
初兒は雛の客稽古なくへ　弥碩
んのそこくは寐覚てあるまじる　里東
佐笹乃香に吹そこなひし笛の役　探志
寐ころしに起えて皆は鳥啼　正秀

秋入乃中若かく月よりも　正秀
まる上京をえゆるやはさむ　及肩
蓋(カサ)に盃鳥羽の町屋ぬ今年菜　野径
雀を荷に篭乃もちて先き　二嘯
うす日のさるはかんみるまと雪霰過く　乙州
樒かしひなく鶯声のきゝのぬれ　弥碩
添て奏本箒 給の袷すくた　里東
撰ねのまきれて寝しきまけみの　探志

暗かりに茶蔵乃戸をとぢ付 昌房
猫子を呼る座まはり口 正秀
いさかひる猿一節に様紀 及肩
ま服かゆる鯉鯛乃秋 野径
はつくれし切篠の残る風迄 二嘯
まかな乃序もかのくの姫居 乙州
冷飯よ味のつくこそ嬉けれ 珎碩
棕櫚―らもれ涼よこ払よする 里東

門をめつて毛のくそにるまあけて 探志
こしほをかくさき元上侍 昌房
まこり身ふ手拭なて纏にかけ 正秀
縄を乗ある寺せん上鼓 及肩
花乃比屋色の日待よそぞこ過て 野径
さくらよ狩の獅子の春風 二嘯

乙州 四
珎碩 仝

里東　四
探志　仝
昌房　仝
正秀　仝
及肩　仝
野径　仝
二嘯　仝

田野

畊道や苗代時乃角大師　正秀
明れバ霞む野鼠乃顔　珎碩
觜ふとのわやくに鳴しまきの元　仝
かまゑ松のしき門口乃文字　秀
月影に利休乃家を鼻くの窓　仝
度々芋をもらふなかめ　碩

虫ハ皆つて称しく水鳴やらむ　秀

竹足しくの木覆よらぬる　碩

誓文を百も書て出る若衆に　秀

なつかしく見たり供乃侍　碩

須广ハまこと椀子自由なる番　秀

梳乃歯る乃かゝまゝやる　碩

月氷る障迄れ空の銀河　秀

無理に究る隠も進まれ　碩

引ぬかれて大腸指を押くれて　秀

獨ある子も綺鷺（チヤホ）に撫られ　碩

江戸酒を花咲故に京いか　秀

あいの山弾き乃入道　仝

雲雀啼里を厩（ヘヘ）糞（コエ）ハかさ高し　碩

火を吹て居る禅門の祖父　秀

本堂ハまこと鼠壁乃ちらし絶　碩

羅綾殊袂ちらて綴ひぬ　秀

歯を痛人乃姿を絵に出て　碩

薄ぐもりさむすごき渡り　秀

藤垣乃窓に紙燭を挟さき　碩

口上果ぬにさらの附置　秀

くるみやしたに小判よせる華袴　碩

御入部る肥後なり隈本　秀

餞は饒も絵て尺る役者衆　碩

寸布子ひとつ投もやれかり　秀

涙山に兀めくや吹らしれく　碩

呼あるまゝれも猫を捕る手　秀

子紀は小人町乃雨あゝのり　碩

やしほの楓木の芽萠立　秀

萩花に雪踏撚つる音あり　碩

小野さゝゐる場にて由ゆるきの径よ　秀

正秀　十九

跡碩　十七

寺町二条
井筒屋庄兵衛板